

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780386

研究課題名(和文)乳幼児の時間的認識と自他関係：協力行動及び選択行動による検討

研究課題名(英文)Mental time travel and Social development in early childhood; in terms of cooperative behavior and selective behavior

研究代表者

吉田 真理子(Yoshida, Mariko)

三重大学・教育学部・講師

研究者番号：30609178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：保育現場の観察および実験より、現段階では次のことが示唆された。
(1)保育現場における過去に関する子ども同士の会話は、次の3つのカテゴリに分類された。自己の過去(自分の過去について、それを知らないであろう他者に報告する)、自他間で共有した過去(自分と他者が共有した過去について、他者に確認・同意を求める。)、他者の過去(自分が知らない他者の過去について質問する。)。 (2)過去に対して事実レベルの違いをすり合わせるようなNegotiationは4歳児以降にしかみられなかった。(3)2～3歳児では、設定された未来の目的に対して言及しながら協力することは困難であった。

研究成果の概要(英文)：The results were summarized in three points.
First, the early children's conversation about past were categorized into three types; (1) self past, (2)Joint past, (3)others past. Second, the negotiation emerged from the age of 4 years old. Third, 2- and 3-year-olds had difficulty in cooperating while referencing the joint future goal.

研究分野：発達心理学、保育内容

キーワード：過去 未来 時間 自他理解

1. 研究開始当初の背景

この10年のメンタルタイムトラベル研究を概観し、特にこれまで研究の少なかった、乳幼児の未来思考の発達を明らかにするユニークな実験課題が増えつつあることを指摘している。そして研究代表者(2011)は、過去や未来をありありと想起・想像するには“自己意識”が不可欠であること、そしてまた、ヒトが時間認識をもつ目的は過去や未来の出来事を“他者と共有する”ためである(渡辺, 2010)ことから、メンタルタイムトラベルを自他関係の発達から捉えること、すなわち社会的機能の側面を明らかにすることが重要であると指摘してきた。

2. 研究の目的

これまでの研究では、「自己あるいは他者いずれかの過去や未来についての理解」に重きを置き、「自己と他者がいかに過去や未来を共有するか」についてはあまり注目してこなかったといえる。しかし上述したように、ヒトにおいて時間認識がなぜ発達したのかという視点からみると、それを明らかにすることは意義がある。そこで本研究では、メンタルタイムトラベル研究を、自己と他者の時間的共有という視点から発展させていく。

そこで、第一の目的は、子どもは保育場面の中でどのようなときに過去に言及し、またそれをどのように他者と共有するのかを明らかにすることである(観察、)。第二の目的は、過去について他者との食い違いがみられると考えられる場面としていざこざに着目し、いざこざのきっかけ(過去)について自他間でいかにやりとりするのかを明らかにすることである(観察、)。第三の目的は、実験場面の中で未来の目的に対して、他者といかにやりとりしながら協力するようになるのかを明らかにすることである(実験)。

3. 研究の方法

(1) 観察

本観察では、子どもは保育場面においてどのようなときに過去について言及し、それを他者と共有するのかを明らかにするために、3~5歳児を対象に観察を実施した。

対象児は、A保育園：3歳児20名(男児8名・女児12名、平均3歳7ヶ月、範囲4歳0ヶ月-3歳1か月)、B保育園：4歳児16名(男児12名・女児4名、平均4歳6ヶ月、範囲4歳2ヶ月-4歳11ヶ月)、5歳児15名(男児9名・女児6名、平均5歳5ヶ月、範囲5歳0ヶ月-6歳0ヶ月)であった。

手続きは、自然観察法における非参与観察であり、子ども同士の会話の中で過去への言及がみられた場合に記録をする事象見本法を基本とした。過去に関する会話の判断基準は、少なくとも次の(a)か(b)のいずれかに該当する場合とした。(a) 目前にない物事

や状況に触れており、かつ過去形である。(b) 過去時制(e.g., “きのう”)が用いられている。記録は、会話の終了もしくは話題の変化がみられた時点で終了した。なお、記録方法は、メモとICレコーダーを使用した。

観察

本観察では、乳幼児期の子どもはいつ頃から過去や未来に言及し、それを他者と共有するようになるのかを明らかにするために、2~3歳児を対象に観察を実施した。ただし、観察とは違って、対子どもだけでなく、対大人との会話も含めた。

対象児は、B市内私立G保育園の2歳児クラス18名(男児11名・女児7名、観察終了時の平均年齢3歳2ヶ月、レンジ2歳10ヶ月-3歳8ヶ月)、および3歳児クラス13名(男児6名・女児7名、観察開始時の平均年齢4歳2ヶ月、レンジ3歳10ヶ月-4歳8ヶ月)であった。観察回数は、各クラス12回ずつであった。一日の観察時間は9時00分から13時00分までであった。

観察

本観察では、過去や未来への言及に食い違いがみられ得る場面として「いざこざ」に着目し、言い争う中で子ども同士がどのくらい過去(いざこざの原因など)に言及したり、それに対する認識において相互に食い違いがみられたりするのかを明らかにすることであった。

対象児は、3歳児クラス21名(男児10名・女児11名、平均年齢3歳6ヶ月、レンジ3歳1ヶ月-3歳11ヶ月)、4歳児クラス20名(男児12名・女児8名、平均年齢4歳5か月、レンジ4歳0ヶ月-4歳10ヶ月)、5歳児クラス19名(男児9名・女児10名、平均年齢5歳6ヶ月、レンジ5歳0ヶ月-5歳11ヶ月)であった。なお、平均年齢およびレンジはいずれも初回観察時のものである。

観察回数は、各クラス13回ずつであり、計39回実施した。毎週特定の曜日に各年齢クラスを日ごとに観察したので、各年齢クラスにつきおおよそ3週間に一度観察に入ったことになる。ただし、祝日や行事等で観察に入れない場合は翌週に延期することもあった。観察回数は、各年齢クラスとも13回ずつ、計39回であった。観察時間は、クラスの子どもの全員がほぼそろそろ9時15分から午睡直前までの約3時間半(クラスによって多少異なる)であった。

記録内容は、いざこざが開始してから終了するまでを1つの事例として、いざこざの当事者及び第三者の子どもの名前と言動をメモによって記録し、後にビデオカメラで正確な言動を追加して、フィールドノートを作成した。なお、本研究におけるいざこざ及び介入行動の定義であるが、いざこざの定義については、第三者の介入行動について調査した越中(2001)にならい、Hartup et al. (1988)

による葛藤の定義『 AがBに影響を及ぼそうと試みる BがAに抵抗する』という2ターン以上のやりとりによって成立するもの』に従った。

観察

観察の対象児よりも幼い2歳児を対象に、いざこざの中でいかに過去に言及するのかを明らかにするために、観察を実施した。

対象児は、2歳児クラス19名(男児9名・女児10名、平均年齢2歳8ヶ月、レンジ2歳2ヶ月-3歳1ヶ月)であった。なお、平均年齢およびレンジはいずれも初回観察時のものである。観察回数は計12回実施した。観察方法については、観察の手順に従った。

観察

観察で得られた事例数が少なかったため、引き続き同じ子どもを対象に縦断的に観察を実施し、いざこざの中で子ども同士が互いに過去や未来に言及する様子を記録した。

対象児は、観察で3歳児クラスと4歳児クラスだった子どもが、それぞれ4歳児クラスと5歳児クラスになったときのものであった。

(2) 実験

子ども同士が共通の未来の目的を達成するとき、いかにやりとりをしながら選択・協力していくのかを明らかにするために、実験を実施した。

対象児は、A市の保育園2歳児クラス10名であった。できるだけ月齢に近い者同士をペアにして、各ペアに3つの実験課題を提示した。

Block Task(ブロック課題): 16ピースの積み木(ネフスピール, スイス製)を二人で協力して高く積み上げるように教示した。

Cleaning Task(お掃除課題): 散乱している紙くずを二人で協力して集めるように教示し、一方の子どもにはほうき、一方の子どもにはちりとりを持たせた。

Washing Task(お洗濯課題): はじめに、落ちている洗濯物を拾って持ってくるように教示し、一人では持てないような大きなカゴの両側の持ち手をそれぞれ1つずつ子どもに握らせた。次に、洗濯物を拾って持って戻ってきたら、今度は1mの物干し竿の両側をそれぞれの子どもの片側を持たせ、先ほどの洗濯ものをハンガーにかけて、子どもと一緒に持っている竿にかけ、洗濯物が落ちていた向こうの物干し竿にかけてくるよう教示した。後日、同じペアに同じ課題に再度取り組むよう教示し、過去への言及について調べた。

4. 研究成果

(1) 子どもは保育場面の中で、どのようなときに過去に言及し、またそれをどのように他者と共有するのか(観察)

観察の観察回数は、各クラス9回ずつ、計27回であった。観察の観察回数は、各クラス13回ずつ、計26回であった。
(1) 過去への言及内容のカテゴリは、大きく3つに分かれた。すなわち、「自己の過去」、「自他間で共有した過去」、「他者の過去」である。各カテゴリの定義は以下のとおりである。

Table1. 過去への言及カテゴリ

カテゴリ名	定義
自己の過去	自分の過去について、それを知らないであろう他者に報告する
自他間で共有した過去	自分と他者が共有した過去について、他者に確認・同意を求める。
他者の過去	自分が知らない他者の過去について質問する。

Table2. 観察における過去への言及カテゴリ別にみた年齢別事例数(重複あり)

カテゴリ	3歳児	4歳児	5歳児
自己の過去	6	11	17
自他間で共有した過去	5	2	7
他者の過去	1	5	8

Table3. 観察における過去への言及カテゴリ別にみた年齢別事例数(重複あり)

カテゴリ	2歳児	3歳児
自己の過去	40	66
自他間で共有した過去	1	2
他者の過去	2	1

Table4. 観察における過去への言及カテゴリ別にみた年齢別具体例

カテゴリ	具体例
自己の過去	(2歳)「昨日地震あったよ~! 来るときあったよ~」 (3歳)「これ、(自分)が使ったやつ!」 (4歳)「(自分)ん家の玄関にな、セミがあったんやで」 (5歳)「(自分)が田んぼでひとりで捕まえたん。すごいやろ。」
自他間で共有した過去	(2歳)「ちゃん(自分)と(友人)と(会話相手)で読んだなあ!」

	(3歳) 組のとき、まんまんちゃん行くとき、通ったことあるなあ？」 (4歳)「E男のおうち行ったらカエルおったよな？」 (5歳)「くん(転出児)顔シカクじゃなかった？」
他者の過去	(2歳)「どこで拾ってきたん？」 (3歳)「(会話の相手)何取ったの？たんぼぼさん？」 (4歳)「G男がぶつかったん？何かされたん？」 (5歳)「“たのしかったおとまりほいく”って誰が書いたん？」

Table4. 観察における過去への言及カテゴリ別にみた年齢別事例数(重複あり)

	2歳児	3歳児
自己の過去	40	66
自他間で共有した過去	1	2
他者の過去	2	1

以上の結果より、乳幼児期の子どもは他者との会話の中で過去に言及するとき、どの年齢においても自分の過去についてそれを知らない他者に報告するというものが最も多かった。

幼児期になると、共有した過去について話題にすることも割合としては多くなった。また、4歳以降になると、自分は知らない他者の過去について質問することも割合としては多くなることが明らかとなった。ただし、過去に対して事実レベルの違いをすり合わせるような Negotiation (Fivush & Nelson, 2006) は、先行研究 (Reese, Haden, & Fivush, 1993) と同様に 4歳児以降にしかみられなかった。

なお、3歳児は、観察では「自他間で共有した過去」の割合が半数に近く多いものの、観察では

(2) 他者との食い違いがみられ得ると考えられる場面としていざこざに着目し、いざこざのきっかけ(過去)について自他間でいかにやりとりするのか(観察 ~)

いざこざ場面の中での過去への言及がみられた事例は、3歳児 26件、4歳児 20件、5歳児 11件であった。

そのうち、過去についての事実レベルの Negotiation がみられたのは 3歳児 1件、4歳児 4件、5歳児は 3件であった。

これについては、縦断的観察の結果を追加上して現在分析中である。

(3) 実験場面の中で未来の目的に対して、他者といかにやりとりしながら協力するようになるのか(実験)

子ども同士だけでは、未来の目的に言及しながら協力行動を進めることは難しかった。詳細については、現在分析中である。

【引用文献】

Fivush, R. & Nelson, K. (2006). Parent-child reminiscing locates the self in the past. *British Journal of Developmental Psychology*, 24, 235-251.

Reese, E. Haden, C. A., & Fivush, R. (1993). Mother-child conversations about the past: relationships of style and memory over time. *Cognitive Development*, 8, 403-430.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

吉田真理子 (2016) 乳幼児におけるいざこざ・葛藤への第三者的関与に関する研究の展望：発達心理学および保育の集団づくり双方の視点から. *心理科学*, 37(1), 57-65. 査読有

吉田真理子 (2016) 友だち同士のいざこざに幼児はどのように介入するか：発達的变化およびネガティブな展開に着目して. *心理科学*, 37(2), 48-63. 査読有

吉田真理子・竹村真菜 (2014) 4, 5歳児におけるいざこざの第三者である子どもの介入行動の種類. *三重大学教育学部研究紀要*, 67, 287-292. 査読無

〔学会発表〕(計3件)

吉田真理子 (2017年3月26日) 幼児期の子ども同士の会話における過去への言及：共有・非共有した過去について自他間でのやりとり日本発達心理学会第28回大会(広島国際会議場(広島県・広島市)).

吉田真理子 (2016年5月7日) 友達同士のいざこざに対する3歳児の介入行動日本保育学会第29回大会(東京学芸大学(東京都・小金井市)).

YOSHIDA Mariko (2013年9月4日) Recalling and planning the temporal order of past and future events in early childhood; Using the lost

property task. European Conference on Developmental Psychology (The 16th Biennial Conference) スイス(ローザンヌ)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田真理子 (Yoshida Mariko)
三重大学・教育学部・講師
研究者番号：30609178

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

竹村真菜 (TAKEMURA Mana)
西尾美沙子 (NISHIO Misako)
上廣真希 (UEHIRO Maki)